

生活諸側面からみた孤立高齢者の諸類型と孤独感

— 中山間と大都市における一人暮らし高齢者調査より —

齊藤雅茂, 平野隆之, 冷水 豊

日本福祉大学地域ケア研究推進センター

【目的】本研究では、一人暮らしの孤立高齢者について、生活諸側面からみた類型化を試み、その基本的特徴と孤独感との関連を分析した。

【方法】調査は、中山間地域（高知県下3町村）と大都市地域（東京都板橋区）で行われた。前者は、2009年10～11月にかけて留置法で実施され、1,132名の回答が得られた（回収率＝94.3%）。後者は、2007年9～11月にかけて訪問面接法で実施され、1,993名の回答が得られた（回収率＝56.9%）。ここでは、調査時点で同居者ありを除く2,425名を分析した。なお、倫理的な配慮として、事前に調査員への説明会を開催したほか、対象者宛に依頼文書をし、同意が得られた方のみを対象にした。

孤立の操作的定義には、別居家族・親戚および友人・近所の人との交流頻度を用いた。各続柄との対面接触と非対面接触をあわせて、週に1回に満たない状態を孤立に分類した（ $n = 348$, 14.9%）。生活諸側面には、視力・聴力・歩行障害の有無、主観的健康度、住環境（居室の狭さ・日当たり・風通しの悪さ）、外出頻度（週に1回未満）、年間所得（中山間：120万円未満、大都市：180万円未満）の9項目を用いた。孤独感には、Russell et al. (1980) の改訂版 UCLA 孤独感スケールのうち7項目を用いた。 α 係数は.944であった。

※本研究は、平成22-24年度文部科学研究費補助金基盤研究C（課題番号22530637）によって実施された。

分析には、孤立高齢者について、生活諸側面の9項目を投入したクラスター分析（Ward法、平方ユークリッド距離）を行った。その上で、得られた孤立クラスターと基本属性および孤独感との関

連について、 χ^2 検定およびF検定を行った。

表 孤立クラスターと孤独感

	(n)	年齢	孤独感 ^{a)}
(a) 生活状態良好	(93)	74.0	15.2 ± 5.3
(b) 低所得	(48)	75.2	17.2 ± 4.9
(c) 低所得・虚弱	(51)	77.1	17.0 ± 5.9
(d) 低所得・悪住環境	(62)	72.7	17.3 ± 4.7
(e) 低所得・虚弱・悪住環境	(37)	80.5	18.2 ± 4.6
非孤立	(1,794)	75.3	16.1 ± 7.4

【結果】最も解釈可能な分類として、表に示した5つの孤立クラスターが得られた。すなわち、孤立者は、低所得であるか否かで大きく分かれ、低所得者のなかで、身体障害や閉じこもり傾向にある群（c）と住環境が良くない群（d）、その両者に該当する群（e）、両者とも該当しない群（b）に分類された。また、大都市では（a）～（d）への該当者が比較的多いのに対し、中山間では「低所得・虚弱・悪住環境」が多くなっていた。孤独感については、孤立クラスター間で有意な差が認められ、孤立者のなかでも「低所得・虚弱・悪住環境」が最も孤独感が強く、「生活状態良好」に該当する孤立は、非孤立と比較しても必ずしも孤独感が高くなかった。

【考察】孤立傾向にある高齢者の生活状況は一様ではなく、一定の多様性が認められた。とくに孤立のみに該当する高齢者は比較的少なく、多くの孤立高齢者は、低所得や劣悪な住環境、健康面の問題を同時に抱えていることが示された。また、孤立者のなかでも生活上の諸問題を抱えている高齢者ほど孤独感が強い傾向にあり、孤立状態の多様性に対応した援助の必要性が改めて確認された。

※本研究は、平成22-24年度文部科学研究費補助金基盤研究C（課題番号22530637）によって実施された。